



営農NEWS



本田中～後期の水管理と追肥

早場米の水稻は、そろそろ幼穂の分化が始まります。幼穂分化・発達期は環境の影響を強く受ける時期です。適切な水管理は低温の害を防止し、穂や根の発達を促進します。また、適切な追肥はイネの栄養条件を良くし、穂（もみ）の発達と充実を促します。幼穂分化期から収穫期までのしっかりした管理で、高品質・多収をめざしましょう。

1 中干し後～出穂期の水管理

中干しが終わったら、**間断かん水（入水を止め自然落水とし、田面が乾く前に入水する）**を行います。間断かん水は、水稻に水と酸素を十分供給し、幼穂と根の発達を促します。特に、**出穂期前後は水を多く必要とする時期**なので、田面が乾かないように細心の注意が必要です（水もちが悪く、乾きやすい水田は湛水管理とします）。

※出穂期とは、田んぼの全部の穂の半分ぐらいが出た状態を言います。

2 冷害対策のための水管理

最近では温暖化にともない、冷害（不稔もみが発生する障害型冷害）の発生が少なくなりました。しかし、梅雨の期間は一時的に低温になることがあります。「あきたこまち」などの早生品種で穂ばらみ期（減数分裂期；出穂12日前頃）が7月上～中旬にあたる場合、**低温が予想されたら幼穂が水の中にかくれるくらいの深水にして、幼穂が17℃以下にならないように保温する必要があります。最低気温が17℃以下になるという予報が出た時は注意しましょう。**

3 出穂期以降の水管理

水稻は幼穂の発達期に水を多く必要としますが、**出穂後も十分な水が必要**です。特に、**出穂期から30日間は水が不足しないように**、十分注意する必要があります。根が最後まで健全であるためには、酸素の供給が必要なので間断かん水としますが、イネに水が不足しないように、田面が乾く前に入水します。**水が不足すると乳白粒などが多くなり玄米品質が低下したり、倒伏しやすくなったりします。**

出穂後30日まで間断かんがいを行うためには、しっかりした中干しにより土を固めておくことが有利です。

4 追肥（穂肥）

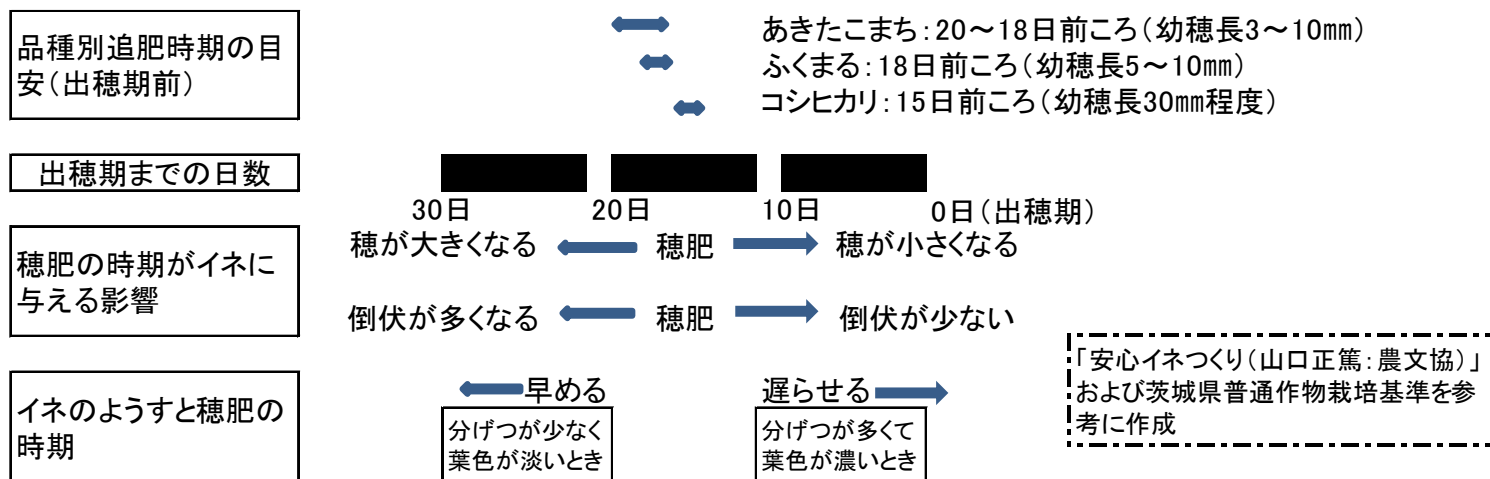


図 穂肥時期の影響と施用の考え方

穂肥はイネに栄養（チッ素）を供給し、光合成力を高め、品質・収量を高めます。しかし、施用する時期で効果が違ってきます。出穂期に対して早い時期の穂肥は、穂が大きくなります（もみの数が多くなります）が、玄米は小さくなります（千粒重が軽くなります）。それに対して遅い時期は穂が小さくなります（もみ数が少なくなります）が、玄米は大きくなります（千粒重が重くなります）。また、早い時期の穂肥ほど倒伏しやすくなります。穂肥の施用は葉色板で4.0程度が適切ですが、イネの生育が旺盛で分けつが多く葉色が濃い（葉色板で4.5以上）時は基準の施用時期より遅くし、葉色が淡い時は（同3.5以下）施用時期を早くします。**施用量はコシヒカリは10aあたり窒素1～2kg、「あきたこまち」と「ふくまるは」は2～3kgが基準**です。品種の特性や生育状況に合わせて施用するようにします。

穂肥の施用時期は、幼穂の長さを参考にして出穂期を予想し、時期を決めます。品種別の追肥時期の目安と、その時の幼穂長は図を参考にしてください。

なお、全量基肥肥料を使用した場合、穂肥は施用しません。

※幼穂長は、平均的な株を数株選び、株の太い稈（分けつ）を抜いてきて、カミソリやカッターで稈の基部をていねいに半分に割って測ります。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040